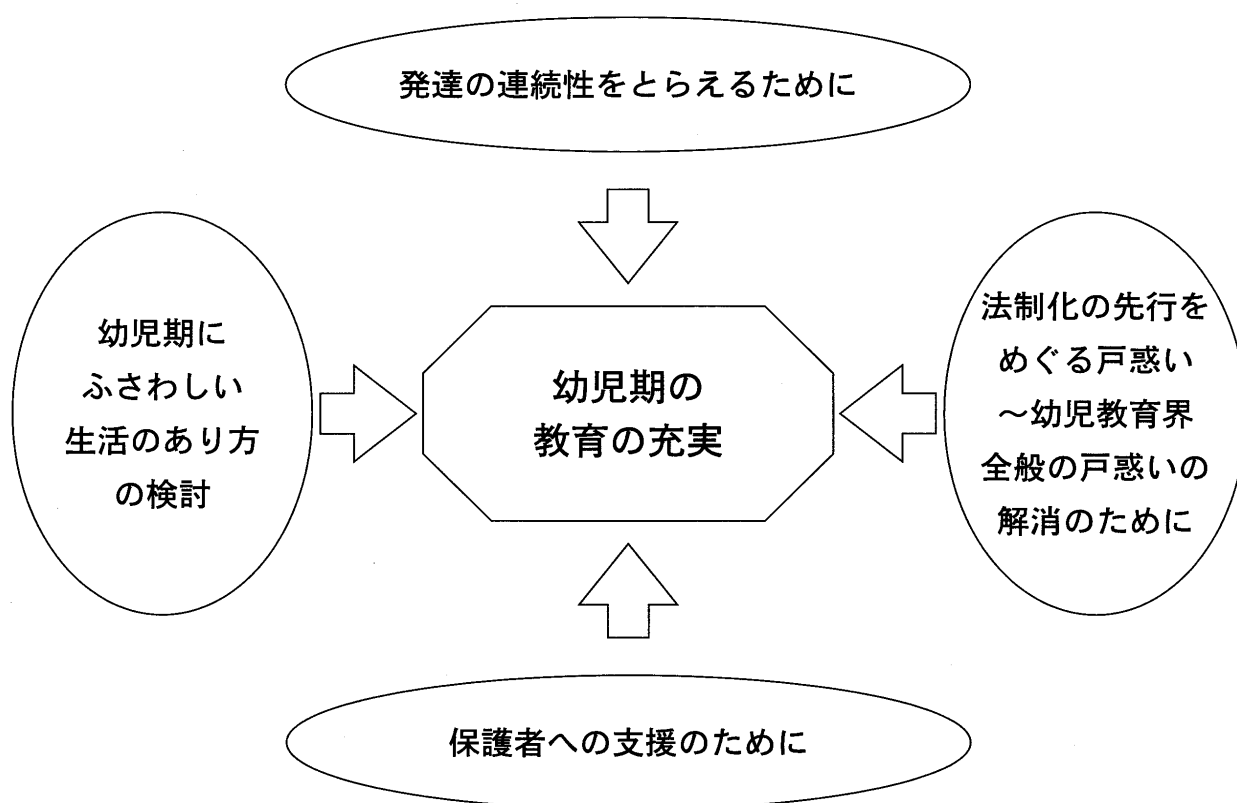


1 研究の動機とねらい



幼児期の教育の充実をめざして

○ 発達の連続性をとらえるために

当園では数年来「協同性」をテーマに研究を重ねてきた。児童期以降の教育を見据えた就学前教育の充実の必要性を感じ、そのために、当初、幼児期後期の教育の充実を目指した。保育の中で様々な事例を洗い出し、姿の見取り、幼児理解、環境の構成、援助、評価等研究の対象としてきた。小学校へとつながる時期の幼児に何を育てておけばよいのか、教育として何を経験しておけばよいのか明らかにしてきた。幼児期後期をより充実したものにしていくには、幼児期前期において何を育てておかなければならないかを知っていることが重要である。そこで、幼児期前期における教育内容や援助、環境の構成にかかわる研究を進め、その時期の教育の重要性を再認識してきた。しかし、幼児期前期の姿を見ると、例えば、好奇心旺盛に動き回るようになる姿が遅くなっているように感じる。もう少しゆるやかに発達の姿をとらえ、入園以前の成長・発達の姿も含めて一人一人を理解していくことが必要ではないか。幼児期前期の教育をさらに充実させていくためには幼稚園入園前の2歳児頃からの連続した発達の姿を探り、幼稚園教育に活かしていく必要性を感じている。

○ 幼児期にふさわしい生活のあり方の検討のために

近年、幼小・保小の交流が進み、それぞれに手応えを感じてきている。県内においても行政主導で相互体験など行われたり報告書が作成されたりと一定の成果を挙げている。しかし幼保小連携とはいいいながら幼保の連携はどうであろうか。本来幼保小の連携とは「幼保＝幼児期の教育」と「小＝児童期の教育」の連携と考えられるだろう。しかし、幼児期の考え方を等しくしなければならない幼保においては、交流さえなかなか進んでいないのが現状ではないだろうか。

当園では5年ほど前から近隣の保育園と交流をしてきた。そこでは幼稚園としても学ぶことが多かったように感じる。例えば0歳児から預かる保育園での一人一人への配慮がなされた環境、一人一人の幼児に対する生活への細やかな心配りなど、私達も行ってはいるが感心させられた。こうした交流を繰り返し幼児だけでなく教師同士も交流について話していく中で結果的に「保育」について話し、互いの保育観を磨いていくことにつながった。その中で保育園の先生方からは交流を通して「一人一人の経験している内容を深く見取り、次の保育へつなげていく」大事さを感じたという話も聞いた。互いが手を取り合い幼児のためによりよい教育方法を探っていくことが必要ではないだろうか。そのためにも互恵性のある交流・連携は必要である。幼保が寄り添い修了、卒園までにこの時期の子どもにふさわしい生活環境のあり方について考えていくために子ども同士が交流しさらに教員同士が連携し研究し互いが得意な分野をもとに議論を重ねていくことで教育（保育）の質が向上していくのではないかと考えたのである。

○ 法制化の先行をめぐる戸惑い ～幼児教育界全般の戸惑いの解消のために～

認定子ども園が法制化され、県内においても5つの幼稚園が「認定子ども園」の認定を受けた。また、モデルケースとして行なわれていた2歳児特区の取り組みも申請し承認されれば行えるようになってきている。待機児童回避などの量的拡大として「次世代子育て支援」が国の施策として進んでいる。5歳児入学や5歳児の保育料無償化など経済界からのアプローチが保育行政に大きな影響を与えようとしている。少子高齢化を迎えたわが国においては「子育て負担の軽減」＝「子どもの数の増加」につながると考えているように映る。しかしそうした動きからは肝心の子どもが置き去りにされていると思えてならない。そんな中2006年全国幼稚園教育研究協議会（現全国幼児教育研究協会）が「幼稚園における2歳児受け入れに関する調査研究」を行っている。そこでは、「2歳児においては3歳以上の教育とは異なる質の保育を行なうことが求められる。2歳児は個々への対応が特に要求され、安定した情緒やゆったりした生活が求められるだけに、きめ細かな養育が出来るよう幼児の人数に応じた2歳児の保育者数の検討が必要である」と結論付けている。そうした研究結果を受け、平成19年3月31日付で文部科学省からも「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について（通知）」が文部科学省初等中等局長名で全国に通達された。しかしこれは制度だけでなく教育（保育）方法にまで踏み込んだ子どもの側に立ったアプローチと言ってよく、2歳児・満3歳児の教育（保育）が行われていない幼稚園であっても今後、「次世代子育て支援」の流れは避けて通れない。そのためにも3歳児保育の充実のため2歳児・満3歳児の発達を見通しておかなければならないだろう。

さて、現在多くの幼稚園で満3歳児の受け入れを行っている。しかし多くの幼稚園においては満3歳児の教育課程の編成がなされていなかったり日々の教育についてさえ手探り状態が続いていたりするようだ。前出の文部科学省の通知にもあるように本来3歳児より一人一人に対する細やかな援助がなされなくてはならない満3歳児に対して3歳児と同じような教育が行われている所も多いようである。ある保護者が「2年間（満3歳児と3歳児）同じ事をさせられた」と言っているのを聞いたこともある。3歳児以降の教育の中で自主的・主体的に行動をおこしていったほしいと願うとき、現在の教育方法についてもっと真剣に考えていかなければならないだろう。そのためにも発達の道筋を知っておくことは重要な意味をもつ。しかし各私立幼稚園でも満3歳児、2歳児の教育については指針もなく、手探り状態が続いていないだろうか。そこで、年齢に応じた教育を行うことがそれ以降の教育に大いに影響を及ぼすので、私たちは国立大学の附属幼稚園の使命として2歳児や満3歳児の発達や行動の研究をし理解を深め、検討し成果を提供していきたいと考えたのである。

○ 保護者への支援のために

幼稚園においては3歳児が集団生活のスタートである。しかし発達を考慮したとき、一人一人においては0歳からそれまでの生活、発達がありその事抜きに教育を語る事はできない。子育て情報が氾濫している今、幼稚園の保護者と話していてあまりにも情報が多く、何を頼りに子育てをしていけばいいのか指針を見失っているように感じる事が多い。父親の姿が見えづらく、子育てが母親一人に任されているという現状も多いようだ。そうした現状では、自分で子どもにはどうかかわったらよいか分からないから多くの言葉を理解するようになる2歳になった頃から「読み書き算」を教え、それを「遊び」ととらえてしまったり、危ないからという理由で外遊びもあまりさせなかったり、自分でできるはずの生活的なことの多くを母親が手をかけすぎるために子どもの経験の機会を奪ってしまったり、と入園までに本来経験してきてほしいことが経験されず集団生活に入ってくる子が増えている。そうした子ども達を見ていると一人一人への教育の手だてとして幼稚園入園がスタートではなくそれ以前の生活の様子や子育ての考え方を知ることが重要になると感じている。私達は2歳児らしい生活を知ることによって3歳児以降の教育の充実を目指したいと考えた。2歳児の発達・生活の姿を近隣の保育園の協力により検証したり、家庭における2歳児の子育ての現状を理解（養育環境や保護者の意識を知る）し、子育てに対する不安を解消し保護者へ還元することも大切ではないかと考えたのである。

2 研究の方法

○ 先行研究・文献研究

2歳児が実際に在園しない当園においては文献や先行研究の洗い出しにより、臨床研究等を参考に2歳児の成長発達や実際の姿を理解する。

○ 外部講師を招いての園内研修

実際に2歳児とかかわりをもっている外部講師を園内に招き幼児や家庭の様子を講話として聞く中で理解を深め、文献・先行研究を深めた話し合いをする。実際の事例を含めた話を聞くことで、幼児の姿をより具体的にイメージし、質疑応答をしながら3歳児との相違や発達の道筋をより理解する。

○ 2歳児の参観（近隣保育園への参観）

2歳児の発達を知った上で、実際に集団生活を送る2歳児の姿を観察し更なる理解を深めるために近隣保育園の2歳児クラスの参観を行う。一人一人発達の違う幼児の保育にあたって、また時期に応じて保育の留意点が違う幼児の育ちに関して実際に見、生活の様子を知り保育士と話し合うことで、それぞれの園で「何を大事にし」「どう育ててほしいのか」を知り、「2歳児の特徴的な育ちや保育方法」を話し合う機会をもつことで、幼児の発達に応じた具体的な環境について理解を深める。

○ 保護者の意識調査（アンケートによる）

発達の連続性を考えると幼稚園入園以前の生活を知る事は一人一人を知る意味でも、保育内容を考える意味でも重要な意味をもつ。また、子育てに関して家庭（主として母親）が抱える悩みや問題を共有する事は今後の教育の参考になることもあり入園以前の様子を保護者にアンケート調査をもとに探る。

○ 「保育を語る会」

県内の様々な幼稚園、保育園、小学校の先生方と意見を交わせる場である。保育園と幼稚園の連携についても話し合う機会を設けてきた。今年度は、幼稚園入園前からの発達の連続性を学ぶために講師の先生を招いたり、2歳児保育をしている保育園・幼稚園の先生方に加えて、地域の子育て支援団体・保護者・祖父母などを招き実際の話聞く機会を設けたりして、それぞれ立場の違う方の話を聞き、2歳児の発達を様々な角度からとらえていきたい。さらに、家庭・地域・幼稚園、保育所など3者が「どう連携をとっていくのか」「何を大事に発達を支えていけばよいのか」共に考える機会とする。

○ 保育所（園）との交流・連携

本園では4年ほど前から近隣の保育園と幼児同士の交流を行ってきた。子供同士が遊ぶだけでなく、教師・保育士同士が話し合いの時間を持ち、経験の質を考えたり、かかわり方を考えていく中で、交流の時期に応じた環境を一緒に考えたり、援助の方法を探ったりしてきた。これまで積み重ねてきたことを整理し、保育園と幼稚園との連携に向けて互いの教育を理解し合ったり、自分達の教育を見直していく契機としていく。